

<書籍紹介>

内藤直樹・石川登 編

『四国山地から世界をみる—ゾミアの地球環境学』

昭和堂, 京都, 2024年, 356頁, 2,800円 (+税)

佐藤吉文

東亜大学芸術学部アート・デザイン学科
yosyfumi75@toua-u.ac.jp

《要旨》

「山地に暮らす」理由とは何であろうか。本書では四国山地を事例に、文化人類学、民俗学、景観人類学、景観社会学、地球惑星科学、地図学、景観工学、土木学、微生物学、食品化学、林業史、日本近世史、景観生態学、農山村資源論、保全生物学といった多岐にわたる専門分野が知を結集して、山地という空間をともにする、非人間を含めた多様な存在のあいだで繰り広げられてきた交渉を「景観」という視点から論じることで、過疎化の進む地域に潜在する価値の「発見」を促すような書である。

キーワード: 四国、景観、ノンヒューマン、ゾミア論、非主体中心のアプローチ

1. はじめに

山口県農林水産部が作成した令和元年の統計資料によると、山口県の74.7%、69.8%が森林および中山間地域にあたる。本学が所在する下関においても面積の半分以上が中山間地域として割り当てられており、令和3年に施行された「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」や令和2年の国勢調査をへて「特定期間合併市町村に係る一部過疎地」に指定された旧豊田町、旧豊北町、旧豊浦町と概ね重なっている。そこには、令和2年の国勢調査に従えば、およそ28,000人が暮らしているのである。そうした地域に身を置き続ける理由とはなにか。そうした問題意識にもとづいて地域の暮らしを捉え直し、地域振興等を考えるうえで参考となりえるのが本書である。

本書の全体構成は次のとおりである。序章と終章をのぞいて、4部で構成されている。その

構成はまた、本書構想の下敷きとなったと思われる「ゾミア」、すなわちヒマラヤから東南アジア、中国西南部との繋がりを感じさせるものである。

序章 四国山地から世界をみる—ゾミアの地球環境学とは何か (内藤直樹・石川登)

【第I部 地質と人間—動く大地とともに生きる】

第1章 四国山地の地質地形と暮らし—生活文化のベースを作る大地 (殿谷梓)

第2章 四国山地の道の風景—現象としての道、施設としての道路 (石川初)

第3章 工作者の風景—徳島県神山町の農家の生活空間 (石川初)

第4章 土地が生む石積みと石積み技術—四国山地に見る生活技術 (真田純子)

第5章 鉱物資源から地域をみる—別子銅山の街の消長と人間活動のかかわり (北野真帆・内藤直樹)

【第Ⅱ部 微生物と文化—〈おいしい〉をつくるつながり】

- 第6章 地域伝統発酵食品としての後発酵茶—阿波茶・碁石茶・石鎚茶・バタバタ茶（内野昌孝）
- 第7章 微生物からみた後発酵茶の地域性（堀江祐範）
- 第8章 アジアにおけるチャの伝播—嗜好品作物としてのチャ（山口聰）
- 第9章 阿波晩茶と地域社会—近現代における晩茶の流通と消費（今石みぎわ）
- 第10章 乳酸発酵茶・阿波晩茶の製法と用具—自家用品と農産品とのハイブリッド型生産（磯本宏紀）

【第Ⅲ部 森と近代—景観を生み出す統治と流通】

- 第11章 森をつくる統治—魚梁瀬山を巡る統治機構と地元民（赤池慎吾）
- 第12章 歴史学からみた近世の山里—阿波国那賀川流域を題材に（町田哲）
- 第13章 山で食べ、山を離れ、山を変える時代—和紙原料栽培をめぐる四国山地と森の変化（田中求）
- 第14章 森を活かす産業—高知における製炭業の変容（増田和也）
- 第15章 森と人の近代史を伝える—魚梁瀬森林鉄道の遺産化のうごき（岩佐光広）

【第Ⅳ部 山村の未来—他者とともにある景観】

- 第16章 草地から〈自然〉へ—剣山系における半自然草地の近代（鎌田磨人）
- 第17章 世界農業遺産のランドスケープ—徳島県西部の山村景観を産業資本主義の跡地として捉える（内藤直樹）
- 第18章 四国山地の集落の景観を支える価値観（市川昌広）
- 第19章 クマもいる四国山地をめざして—自然との対立から共存へ（安藤喬平）
- 終章 日本の地域を見ることの面白さ—東南アジアで再発見する四国（片岡樹）

以下では、この書を手取る際に指針として、各章の内容を簡潔に紹介してみたい。

2. 各章の内容

序章では、①景観生成に関わる様々な人間や非人間の存在、②過去（や未来）の存在による活動と景観との関係、③地理的に離れた空間の存在による活動と景観との関係、④物理的な景観生成をめぐる政治への関与という4つの論点に着目しながら、「ゾミア的空間の1つとしての、四国山地の山村景観の動態に関わる地質・生態学的、社会・経済的、歴史・文化的要素の連関を検討」する本書の目的とともに、人間を例外的存在として扱わない非主体中心的アプローチ、景観を捉えるうえでの本書の理論的背景が示される。考察の主体となる四国山地の山村景観とはすなわち、「人々が取り持つ社会的諸関係の総体」であるとともに、その景観を構成するあらゆる存在がもつ「ユニークな時間やリズム」のあいだのすり合わせによって立ち上がる歴史的視点が欠かせないこと、そして、非人間を含めた存在による外密的⁽¹⁾な働きかけや応答の結果として景観が生成する動態だという。この複雑な関わりをとらえるため空間スケールとして、本書では、マトリックス、コリドー、パッチという景観生態学の概念が導入されている。

続いて第Ⅰ部は5本の論考で構成される。第1章では、まず四国山地というマトリックスの成り立ちとその地形や地質の特徴が整理され、山地集落というパッチが地質帯の岩石学的構造によって生み出された地すべり地形のうえに営まれてきたこと、地質の違いが生業を方向づけてきたこと、そしてそこに住まう人びとの「動く大地」という認知を基礎づけていることが示される。それらは、非人間（＝地形）の活動リズムに寄り添いながら働きかける生活技術であり、言葉や妖怪伝承のなかにさえ、山地に定着した人びとの特有の歴史を帯びた景観を刻み込んできた。過疎化によって失われかけているそうした文化を「地球の記録」としてとらえる著者は、最後にジオパーク地質専門員として、プ

レート運動によってかわり続ける四国山地にこれからも残るもの、残されるものとは何かを問う。

第2章は、徳島県神山町を事例に、四国山地に張り巡らされた樹形に伸びて集落で行き止まる「道路／車両系」の道と、生活道路として網目上に集落をつなぎ「人道／歩道」ともいべき道のそれぞれが、利用者に異なる景観として生起して経験される状況が論じられる。ともすれば近代化の象徴として「人道／歩道」の対局に位置付けられる施設としての車道だが、いつの頃からか始まった住民の生活習慣のなかで、部分的に切り取られて歩きやすい散「歩道」として認知・経験されていく状況や、変化する生活者の暮らしによって使われなくなったり、補修されてふたたび生活空間に生起する「道」の動態は、分析属性で事物を固定的に把握しがちな研究者の思考に反省を促す例として興味深い。

第3章では、自然物と加工物とを問わず、日常の暮らしのなかで手にはいるありあわせの建材・部品を巧みに組み合わせ加工した橋や石垣、サル追いから手近な農機具などの手作りの工作物と工作技術のなかに、その土地に暮らす人びとによる自然への姿勢や態度が見出される。例えばそれは、張り替え工事の結果廃材となってしまったコンクリート片さえも、自然石と同様に石垣の建材として読み替えて自分たちの物質文化のなかに絡め取る力を備えたものであり、著者は、それぞれの場面で使われる部材や部品が家周りにストックされる景観や、工作において手間を極力控え、完成後の見た目上の統一感や構造計算を度外視して異質な部材を即興的に組み合わせ仕上げる技術の背後に見出される「ゆるさ」にもとづいた分類思考に、その要因を求めている。

第4章では、中山間集落の歴史や暮らしの理解に不可欠で、なおかつその特徴的な景観である棚田や段畑を特徴づける空石積み技術が調査をもとに詳細に取り上げられ、四国山地においても日常的な維持管理もままならない実情が浮き彫りにされるとともに、生物多様性や文化的景観という新たな評価軸によって石積み技術の

再価値化が進行する一方、日本においてはその価値づけが見た目などの表層にとどまり、地すべりなどの自然の活動に働きかける技術としての理解にまで及んでいないという課題が示される。手近な建材で無駄な労力をかけずに積まれる石積みは地域性を色濃く反映するが、いまやその技術は消滅の危機にある。著者らは、石積みを農村の普通の技術にもどす「石積み学校」を通してこの課題に取り組んでいる。

第5章では、かつて世界的な採掘量で世界各地の貨幣経済を駆動させる原動力ともなった愛媛県新居浜市の別子銅山と、市内から移転された精錬所を中心に無人の土地から鉱山街へ成長した沖合の四阪島の発展史が、採掘や精錬、排煙脱硫の技術が生み出す大地のリズムと人間活動のリズムの重なりとズレとして読み解かれる。明治末期の開所後、一時は不夜城とまでいわれた島は、今でこそ銅精錬を停止し、亜鉛精錬を続ける通いの社員と施設を荒らすイノシシだけがわたる無人島へと帰した。だが、著者らは、そこが、イノシシとその駆除に楽しみや「里帰り」を見出す元所員やハンターとのあいだに新たな関係を創発する場であることに注目し、環境破壊や廃墟を自然と文化の二項対立にもとづいて「世界の終わり」と捉えがちな視点に反省を促す。

次の第Ⅱ部もまた5本の論考で構成される。第6章では、現在も四国三県で製造され親しまれている三種類の後発酵茶、すなわち徳島県の阿波晩茶、愛媛県の碇石茶、高知県の石鎚黒茶の特徴が、富山県のバタバタ茶とも比較しながら、とくに製法の視点から整理して提示される。本来は地域に自生する「ヤマチャ」を原材料に用いて、真菌や乳酸菌の活動に発酵工程を委ねて製造されるそれらの後発酵茶は、繁殖を可能にする地形や気候のリズムと人間活動のリズムにくわえ、微生物の活動リズムが重なることで実現されるが、複数の真菌や乳酸菌、酵母が、地域ごとに異なる割合と組み合わせのもとに活動することで、固有の味わいをうむ。さまざまな健康機能も確認されているが、すでに製造されなくなった後発酵茶も四国には少なくなく、技術継承の課題が指摘される。

第7章では、後発酵を促す乳酸菌の出所が、四国三銘柄の製造工程の違いを踏まえながら検討される。収穫後の茶葉にも乳酸菌は付着しているが、それは発酵過程に関わる菌とは別種であり、製造初期の葉茹で工程で他の微生物とともに殺菌される。そうした状況で発酵を左右する乳酸菌が増加するのは、加熱後の樽詰めで整えられる嫌気環境のもと、碁石茶や石鎚黒茶では真菌がデンプンを糖に分解する際に発する熱によって乳酸菌の好む生育環境が整えられる。発酵を促す乳酸菌が混入するメカニズムは未解明であるが、著者は、剣山と吉野川を挟んだ東西で、同じ製造工程と銘柄であっても発酵主体となる乳酸菌が異なることを指摘して、大地のリズムと微生物のリズムの重なりを示唆する。

第8章では、人間が嗜好品に用いた植物のなかでチャノキが占める位置付けやその利用方法としての茶文化について概略を示しながら、日本における茶栽培の起こりについて、遺伝形質や遺伝子マーカーに着目した研究成果にもとづいて論じ、最後に四国の後発酵茶の始まりが考察される。各地の茶産地や「自生地」のあいだで異なるものの、日本の標準種は、浙江省など中国南部に由来する雌しべの短い種を多く含む集団を基礎に広がったことが指摘される。その一方で四国はチャの生育が容易な土地ではないこと、塩分を含む水でも味わいが損なわれない後発酵茶が瀬戸内海に向かう地域に産することなど、四国の茶産地の特徴が浮き彫りにされる。

第9章では、後発酵茶のなかで最も知られた阿波晩茶の生産が、市場経済の成り行きや社会情勢を背景とした産業構造やライフスタイルの変化のなかで山村住民によって時代ごとに選り取られた生存戦略として理解されたうえで、飲用や魚介調理の臭み消しとしてだけでなく、葬儀や盂蘭盆会の供物として、広く地域の習慣に根付いてきた晩茶が、味わいや効能といった点だけでなく希少性や歴史性など地域の生き様を象徴する反消費社会的な資源とさえ価値づけられ直されていることが指摘される。そうして生産者と消費者を新たにむすびつけるのは、家庭の味として茶の習慣を広める役を担った仲買人

や茶商を介した流通網ではなく、現代的な情報ツールである。

第10章では、春先に摘まれた茶葉を用いる釜炒り茶や収穫時期の遅い茶葉を用いる寒茶も製造する徳島県下の茶生産のなかで、阿波晩茶の特徴とその製造工程が用いられる道具工作類に注目しながら提示されたあと、晩茶づくりの負担を減らすために導入された動力化や機械化に着目してその特徴が明らかにされる。そこでは、動力化や機械化が一部の工程に限られること、新規の機械購入や機械開発ではなく手近にある本来別用途の機械を転用したり、地元の鉄工所や大工に工作を依頼すること、手前で機械を所有できず人手も頼めない小規模生産者には、機械を持参して茶摺りなどの工程を請け負う生産者も存在し、そうした局地的な対応が、商品であり自家用品でもある阿波晩茶のフェジイな生産を特徴づけていることが示される。

第Ⅲ部もまた5本の論考で構成される。第11章では、現在四国屈指の天然林を誇る高知県東部の魚梁瀬山一帯というパッチが、近世以降に土佐沖を通る対明南海航路開始を契機に良質の木材の供給地として上方市場と結びついで、さまざまな外部社会とコリドーで結びつくことで、留山や札制、植林事業による管理・保護対象、幕府による普請課役対策として財政基盤、明治期以降には中央政府管轄の国有林化と「有害樹」の資源化、そして高度経済成長期の開発対象として統治機構によってさまざまに目指され、形作られてきた状況が歴史資料をもとに論じられる。魚梁瀬山の巨木林は単なる手付かずの自然ではない。山林開発を可能とする地形的マトリックスや、権力機構が生み出す統治の技法、森林軌道をはじめとした開発補助技術、輸送経費削減による商品化目処などが複雑に交錯した結果なのである。

第12章では、現在の徳島県那珂郡那珂町の一部をなす旧木頭村で代々肝煎をつとめた湯浅家の文書をもとに、平地と同様に幕藩体制下に組み込まれた林業地帯形成以前の山里において、焼畑として、あるいは休閑期における薪炭やコウゾ、ヤマチャといった特用林産物の獲得に山を利用する「切畑」が、その所持権や用益

権を管理する父系同族集団「株」の内部や、村落運営主体「村中」を構成する複数の「株」のあいだばかりか、年貢に代わる現金を得るために林産物を取引する村落外部の運搬業者や仲買人との社会関係というコリドーを刻み込んだ景観として提示される。そこから見えてくるのは、狭い空間に閉じられた均質的な山里像ではなく、資源を介して集落内外の社会的諸関係へと開かれた社会である。

第13章では、高知県吾川郡いの町柳野地区を事例に、ミツマタやコウゾの栽培適地に恵まれ日本三大和紙として名声を博した土佐の和紙づくりが置かれている現状が報告される。戦後復興を支える施策であった植林の奨励と和紙需要の激減、そして自然災害を契機とした人口流出といった内外の要因によって、「食べていくための生業」たる焼畑と山に日常的に関わることで営まれてきた山村での暮らしに生じた空間、心、関わり「隙間」は、山菜取りや狩猟や養蜂などのマイナーサブシステムを広げる空間としてあらたに再生する可能性を秘めているという。その上で著者は、その空間をさらに押し広げつつ、再造林放棄地などを短期的かつ安定的な収益空間として再生する方法として自身も手掛けてきたミツマタ栽培を提案する。

第14章では、高知県室戸市佐喜浜町の製炭業をめぐる景観が、明治期後半以降の都市化と工業化の進展にともなう需要拡大と都市部と近郊農山村を結びつけた交通路の整備を背景とした商品生産の定着以降、戦後国策としての石油や天然ガスを主体とする燃料革命、高度経済成長に下支えされた消費者の高級グルメやアウトドアレジャーへの嗜好拡大、国内需要の高まりに対する木炭の輸入動向、そして製炭業従事者の高齢化などとあいまって、黒炭を中心とした大量生産から白炭を中心とした高級品生産へ転換しながら、炭窯の固定化やウバメガシ使用への特化、原木調達と製炭の分業化に特徴づけられる現況へと移行してきた過程が示される。国内需要をまかない、消費者拡大の契機となりうる安価な輸入木炭と国産品はいまや相互依存の関係にある。

第15章では、かつて木材運搬用に官営とし

て高知県内に敷設され、国内の木材需要を支えながら、1959年の国有林林道合理化要綱を契機に廃止に至った魚梁瀬森林鉄道が近代化遺産として再発見された事例をとりあげ、木材運搬という「おもての顔」とは異なる森林鉄道の「もう一つの顔」をめぐる景観が、史資料や現地調査にもとづいて示される。それは平野部に暮らす人びとの日常の記憶、すなわち農作業や学校生活と結びついた森林鉄道をめぐる景観であり、民間の生産物運搬のほか、制度の隙間で特例的に認められた旅客事業における利用者の特別な経験—祭神や結婚式、遠足や出兵—が刻まれた景観であった。近代化遺産の意義とは、単なる産業遺構ではなく、地域住民の生活史との絡まりあいのなかで生じる景観にこそある。

最後の第IV部は4本の論考で構成される。第16章では、旧東祖谷山村を事例に、森林が広がっていても不思議ではない剣山系の山頂や稜線に広がる草原というマトリックスが、集落内の20～30戸の世帯によって構成される「組」の管理下におかれ、刈り取りから新芽を促す火入れ、刈り取ったススキをもちいた屋根葺きにいたるまでを共同で行う住民によって意図的に維持されてきた人工的な景観であることが示される。中世以来、移動先の山地の稜線沿いを自由に利用した木地師の活動に遡るその景観は、物資や人の移動経路の確保のほか、山菜採りの空間でもあった。だが、過疎高齢化により「組」の活動が難しさを増す現在、かつて焼畑の休閑池を利用し、有機肥料としてススキをコエグサに変えてきた茅場空間とともに、稜線沿いの草原は次第に消失しつつある。

第17章では、世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」を事例に、徳島県西部の三好市を含む二市二町の山村景観を特徴づける傾斜畑が、降雨による栽培に適した表土の流亡を抑えるために採草地で集めた茅を肥料として土壌に鋤込む技術や、表層土下に広がる脆い片岩を地中深くまで砕いたり、流れた土壌を斜面上部に戻すための農具、そして流れた表土をあげ戻す共同の労働システムを介して、持続的に環境に働きかけることで維持されてきたことが示される。だが現在、過疎高齢化した山村で営ま

れる農業の姿は、伝統的な自給自足の暮らしというよりも、明治期以降の専売制によってこのゾミア的空間を国家と強く結びつけた葉タバコ栽培の跡地に生きがいとしての農業実践であることに筆者は注意を促す。

第18章では、剣山系の西端、高知県長岡郡大豊町東部の東豊永地区を事例に、地形学的／地質学的要因とそのうえで伝統的に築き上げられた土地利用について外観したうえで、道路沿いの雑草を除去する道役といった共同作業の場や、イイ（結）と呼ばれる共同的な労働交換のしくみ、そして道ばたでの談義中の草むしり、あるいは集落規模の祭事後の会食を世話する当屋等をつうじて身体化され、地区の景観を生み出してきた集団化をうながす社会文化的装置が、とりわけ住民たちの生活の端々に現れる価値観を意識化しながら論じられる。進行する過疎高齢化によって集落が縮小するなか、著者は、移住者や帰郷者、あるいは大学や企業が住民とともに取り組む様々な地区再興の動きに、新たな価値観による集団化の可能性とポスト産業社会における意義を見出している。

第19章では、「絶滅のおそれのある地域個体群」である四国山地のツキノワグマと人間の関係史として四国山地の景観をとらえ、人身被害や農業被害をもたらすクマの保全には、クマが森林の生物多様性にも貢献するといった地域住民を受容へと差し向ける正しい知識を行政や民間の活動をつうじて普及するだけでなく、クマ

が生息するという事実を四国山地の「自然の豊かさ」と結びつけて新たな経済的価値を付加することが、野生動物と共存することで生じる緊張関係や被害の許容度の低下を促し得ることを、南ヨーロッパのディアル・アルプスの事例と徳島県那珂郡木頭地区での養蜂の取り組みを交えて示している。益か害か、許容できるかできないかといった自然保護をめぐるしばしばわたしたちに二者択一を迫る価値観を乗り越える思考が、地域再生／創生の鍵になると著者は最後に主張する。

最後に終章である。終章では、文化人類学者である著者が、タイ国の中国廟やゾミアと称される東南アジア内陸部での属人的な前近代国家といった自身の調査フィールドたる東南アジアで培った見識をもとに、日本人が当然視する宗教観や国家観を突き崩したうえで、四国において神仏分離令後も現在に至るまで信仰を集める石鎚信仰や金比羅信仰のほか、高知県の物部地域で中心村で地域を取りまとめる名主と従属村に暮らす家臣たる名子が人格的に結びついて成り立っていた属人的ネットワークとでもいうべき「名」のあり方が検討され、四国を舞台とする「もうひとつの近代史」を想像することへと読者を誘っている。そうした東南アジアと日本とのあいだにみられる「奇妙な並行現象」は、新たな「文明の生態史観」が四国から論じられる可能性を秘めていると締めくくる。

註

- (1) extimacy の訳。人間による認識や理解の外側で生起しながら、非人間との関係において欠かせない活動を指す。